

理想国家、「エルドラド」

阿部律子

I. 序

ヴォルテールの哲学コント『カンディッド *Candide*』（1759）の第17章と第18章では、高い山々に囲まれた人跡未踏の国「エルドラド」の様相が描かれている。人跡未踏といえども主人公のカンディッドとその召使いのカカンボはこの国に暗黒の地下を24時間かかって偶然にもたどり着いて、旧大陸とは何もかも性格が異なるこの異国で数カ月間にわたり見聞を広めることになる。このような暗黒の地下旅行からこれを通過儀礼と見なす人もいる¹⁾。この「エルドラド」は、その名の通り、スペイン人のペルー征服以来ヨーロッパ人の想像力を大いに掻き立て、18世紀になってもまだヨーロッパ人を魅了し続けたユートピア「黄金郷」である²⁾。もちろん「黄金郷」ということで、このコントでも、例えば道ばたで子供たちが遊ぶ石けりの石がルビーやエメラルドであったり、砂が黄金だったり、あるいはまた、ホテルの給仕の服が金の布地だったりと幻想的に描かれている部分もある。しかしながら、エルドラドを少し見聞した主人公たちに「いったいこの国は何という国なんだろう、世界中の誰からも知られていないし、その上ここでは自然すべてが我々のものとは随分違う種類に属している。ここが恐らく万事がうまく行っている国なんだよ。だって、このような類のものが絶対にあってしかるべきだから³⁾」と言わせて、このような万事がうまく行っている理想的な国が存在すべき国であることを作者は示唆している。

その上、このエルドラドに関する記述は、彼がさまざまな作品の中で繰り返し語っている彼独自の啓蒙哲学思想とも大いに関連がある。ヴォルテールがこのエルドラドの描写で意図したことは、むしろ現実のヨーロッパ社会、中でも特に彼が手ひどい待遇を受けたフリードリッヒ2世が君臨するウェストファリアと比較して痛烈に批判しながら、彼自身の啓蒙哲学思想を具現するような一つのモデル国家を読者に提示することではなかったかと思われる。そのために、このエルドラドは、ヨーロッパからはるか彼方の新大陸南米の非現実的な国としてではなく、ヴォルテールのヨーロッパ的価値基準に合わせて創作されているためか、ある種ヨーロッパを思わせる面もあってどこか現実味を帯びて現出し、幻想、理想、現実、矛盾が渾然一体となった形で読者に提示されている。

本論では、ヴォルテールが理想とする国家や国民生活がどのようなものであるかを探ってみたい。

II. 国家経済

カンディッドとカカンボがこの国に到着して最初に気づくことは、「ついに彼らの前には人跡未踏の山々に囲まれた広大な眺望が開けました。この国は必要のためと同時に快樂のために耕作されていました。そして、有益はどこでも快適なことでした。道路はきらびやかな形と素材でできた馬車で覆われているというよりも飾られていました。この馬車は特異な美しさの男女を乗せて、大きな赤い羊によって引かれていましたが、その速いこと、アンダルシアや、テツアンや、メキネスの馬をものぐさ速さでした」¹⁾である。この第一印象は、地平線まで広がる広大なエルドラドでは国民は生活の糧を得るために土地の耕作に励んでいるが、農耕という労働自体が彼らにとってはまた楽しみにもなっている。そして、このような国民の生産活動は国家にとっても有益であり、この生産活動によって国家は栄え、国民はその豊かさを享受し、馬車の保有台数も多く、道路も馬車で埋め尽

くされるほどである、というように解釈できるのではないだろうか。このようなエルドラドの描写の中には、すでに述べたように、ヴォルテールの啓蒙哲学思想がかいま見える。

それでは、このヴォルテールの啓蒙哲学思想とはいったいどのようなものであるのかを検討してみよう。まず、「耕作」ということから、ヴォルテールが国家の経済活動の中でも農業に着眼していることが分かる。しかも、この「耕作」や「農耕」という表現は、単にこのエルドラドの描写にだけ使われているものではなく、この哲学コトの結論自体「農耕」がキーワードとなっていることから注目にも値する。ここで少しコトのあらすじを述べよう。カンディッドはドイツの何代も続く由緒ある貴族を両親に持ったが、不幸にして庶子として誕生したことから、伯父の男爵一家から手ひどい扱いを受けた後は、戦争、大地震、宗教裁判などにも遭遇し、しかもヨーロッパだけでなく大西洋を渡って遠く南米をも放浪した彼は、恋人であるいとこの男爵令嬢キュネゴンドを追ってついにはトルコのプロポティッド河のほとりにたどり着く。しかし、再会を夢見た恋人は昔の面影はなくやつれ果て、しかも口やかましくなっていて、カンディッドの結婚の意思も遠のく。しかしながら、他の仲間といっしょに暮らすために、エルドラドの王からもらったダイヤモンドをもとにして小さな農場を購入する。だが、労働は下僕のカカンボだけに任せて、自分たちは恩師のパングロスたちとさまざまな議論を繰り広げる。しかしながら、このような実体のない無為な生活の中では退屈や倦怠が一同を支配する。カカンボも仕事に疲れ果て、自分の運命を呪うようになる。このような生活から脱却するために、彼らはある日付近に住むトルコと名の通ったイスラムの修行僧にお伺いをたてに行く。ところが、彼らが善と悪、人間の創造、人間と神の関係などといった形而上学的な質問をしたために、修行僧は怒って、無駄な議論はやめて「黙ること」を指示する。その帰路、小さいながらも自分の農地で家族といっしょに農耕に励む善良な老農夫と話す機会を持ったカンディッドの考えに大きな変化が訪れる。生産活動に励むこの老農夫

の賢明な生き方に感銘を受けたカンディッドは、この農夫の生き方を価値があり、それまでに会った有為転変の波瀾に富む王侯貴族の人生よりも農夫の人生の方が幸せだと思うようになる。そして、イスラム修行僧の言辭とこの老農夫の生き方を教訓にして、カンディッドと仲間たちはそれぞれの才能を活かしながら、土地を資本に生産活動に励む。その結果、小さな農地は大きな収穫をもたらすようになる。このような結論はエルドラドの農村風景と一致しているように思われる。

では、いったいなぜヴォルテールは農耕や農業を重視する重農主義的な考えを抱くようになったのだろうか。若き日の彼はどちらかと言えばむしろ重商主義に傾斜する思想を抱いていたと言えよう。『カンディッド』の執筆に先立つ25年前、1726年から1728年までの1年半におよぶイギリスでの一時亡命時の見聞をもとにして著した『哲学書簡 *Lettres Philosophiques*』(1734)の第9信「政治について」の中で彼は、イギリスではその昔農奴状態に置かれていた農民が、民主的な政治が行われることによって、「ここにはおおよそ20万フランの財産を持つ多くの農民がいるが、彼らは自分たちを豊かにした農地を耕し続けることをいとわずに、そこで自由に暮らしている」²⁾と農民について多少言及してはいるものの、第10信「商業について」の中では、「イギリスにおいて国民を豊かにした商業は、彼らを自由にすることに寄与したが、この自由は今度は商業を発展させた。その結果、国家の隆盛がもたらされた。この商業こそが次第に海軍力を確立してゆき、それによってイギリス人は海の支配者になっている。……だから、王国の上院議員の弟だからといって商売をばかにしたりはしない。國務大臣のタウンゼント卿にはシティの商人であることに満足している弟がいる。オックスフォード卿がイギリスを治めていた時、その弟はアレップで仲介人であったが、そこから帰国しようなどとは思わなかったし、そこで生涯を終えている。……「古い家柄」を後生大事にしているドイツ人には、イギリス貴族の息子が金持ちで有力なブルジョワでしかないことがどうしても分からないだろう。……フランスでは、なりたければ誰でも侯爵になれる。

……商売人はよくばかにされるが、商売人自身も自分の職業が侮蔑的に話されているのをよく耳にするために、愚かしくも自分の職業を恥じている。……しかしながら、私はどちらが国家のために役に立っているかどうかは分からないが、髪粉をふった貴族は……大臣の控えの間で奴隷のような役を演じながら、偉そうな風を装っているが、国家を富ませる商売人はその仕事場からスラットやカイロに指令を送って、人々の幸福に寄与している』³⁾と書いてむしろ重商主義的の見解を示している。もちろんこのような視点を若き日の彼が持っていたのは、彼がパリの裕福なブルジョワ階級の出身であり、しかも彼の作家活動の拠点もパリであり、亡命先もロンドンといったように、彼を取り巻く環境のほとんどが大都会であったために、自分の周囲で行われている経済活動と言え、もっぱら商業活動だったからだと思われる。しかしながら、若い頃にこのように重商主義的思想を抱いていたとは言え、ここで注目しなければならないのは、彼が早い時点からすでに経済活動が国家経済や国民生活に及ぼす影響について関心を示していることである。しかも、このような視点や関心はその後もずっと変化することはなく彼を支配し、後に述べるような彼の後半生の啓蒙思想の展開やその実践活動の原点ともなっている。それにまた、この経済活動という観点から、彼は支配階級である貴族を（そして聖職者に対する攻撃はもっと激しいが）無為であるがゆえに無用の存在と見なし、貴族よりも第三身分の商人の方が国家経済に対する貢献度は高いと主張している点も重要である。このような反体制的思想を抱いていたからこそ、彼がこの半世紀後に勃発するフランス革命に対して大きな影響を与える啓蒙哲学者⁴⁾になることができたのである。

このように、経済に関する視点はどちらかと言えば重商主義的から重農主義へと移行していったヴォルテールであるが、どの時点からこのような変化を示していったかについては明確な答えを見いだすことはできない。彼は『哲学書簡』の発禁処分のために、1734年から1749年まで、その間にヴェルサイユ宮殿で「王室側近侍従」や「フランス史料編纂官」などを務

めた40年代後半の一時期を除いては、もっぱらデュ・シャトレ公爵夫人とともに彼女の夫が所有するアルザスの人里離れたのシレー城で過ごしている。ところが、彼を取り巻く地理的条件にもかかわらず、彼は農業に対しては関心を示してはいない。おそらくこの彼の経済に関する思想上の変化は、その後の1750年代に起こったものと思われる。ヴォルテールはフランス宮廷でも失望し、しかも長年連れ添ったデュ・シャトレ侯爵夫人を失った後は、保護を求めるかのように、1750年から1753年までの3年間をかねてから文学の師弟のような関係にあったプロシアのフリードリッヒ2世のもとで過ごす。ところが啓蒙君主と思いついでいた若きプロシア王は単なる専制君主に過ぎず、ついに彼とは仲違いとなり、プロシア脱出を試みる。しかし、フランスから迎えにきていた姪のドゥニ夫人とともに王の命によりフランクフルトで12日間拘留という屈辱的扱いを受ける。遺恨を持ってプロシアを去ったヴォルテールは、かといってパリに戻る許可も取り付けることができず、仕方なくマンハイム、ストラスブール、コルマールを経て、極度の精神的・肉体的疲労の中で、やっと1754年の暮れにジュネーヴに到着する。そして、このプロテスタントの都市のジュネーヴに定着する思いで、ここに早速土地と館を購入する。館にはその定着の喜びを表現するかのよう「快樂の館」と名づける。「夢見ていた庭」⁵⁾を獲得できた歓喜のほどは、彼の友人に宛てた書簡の中の「エピキュロスの庭がある哲学者の館」⁶⁾という表現や、「ジュネーヴの湖の近くにある自分の土地に到着した作家」⁷⁾と題した書簡詩に見いだすことができる。彼はずっと以前からヨーロッパ中に知れわたったフランス一の叙事詩作家、劇作家であったが、自分の土地や館というものを持つことはなく、常に王侯貴族の友人の城館から城館へと移り住む生活を送っていた。もちろんこのような城館での生活は確かに物質的には恵まれたものであったと思われるが、その反面、実質的には寄生生活でしかなく、このような生活は王侯貴族への精神的従属を強いるものであり、生来的に反体制思想の持ち主であった彼は内心「屈辱感」⁸⁾を味わっていたのではなからうか。そのために、やっと手に入れた

土地で「自由」⁹⁾や「独立」¹⁰⁾を感じことは想像に難くない。そして、彼は書簡の中でたびたび自分の土地での農業や農耕の楽しさを語っている。しかしながら、この自由や独立の感情もそう長く続くことはなかった。グランベールが担当した『百科事典』の「ジュネーヴ」の項目をめぐるジュネーヴのプロテスタントの牧師たちから反発をかってしまい¹¹⁾、せっかく確保したはずの自由や独立を脅かされることになる。そうかといって、ルイ15世はかつての「王室側近侍従」を心底嫌い、ヴォルテールのパリやヴェルサイユへの帰還を頑として受け入れることはなかった¹²⁾。自らの運命を認識した彼は「事実上の亡命」¹³⁾生活を覚悟し、「独立の根拠地」¹⁴⁾を求めることを決心する。もちろん、政治支配の中心地から遠く離れたこの「独立の根拠地」が、ゆくゆくはフランスのみならず、ヨーロッパ中のインテリゲンチアの中心地¹⁵⁾、あるいは18世紀フランス啓蒙思想の最大発信地となっていく。しかしながら、当時フランス王もこのように彼を拒絶したことがその25年後には旧体制の命運をも左右することにつながっていくなどはまったく予期することすらできず、大きな誤算を犯したと言えよう。

そして、『カンディッド』出版の数カ月前、つまりこの哲学コントに最後の手を入れていた1758年の秋¹⁶⁾に、フェルネーとトゥルネーの土地購入を決定する¹⁷⁾。特にこのフェルネーでは領地に隣接する土地もいっしょに購入したために、エルドラドのように「広大な眺望が開けている」¹⁸⁾ことにこの地を初めて訪れた彼は歓喜の声をあげる。ところが、この素晴らしい眺めとは裏腹の村の貧しさに愕然としてしまう。というのも、ヴォルテールの観察によると、まず村人の収穫の大部分は貢租として領主のもとに送られ、そのうえ農民には諸々の租税が課せられていて負担も大きく、村人はどうにか死なない程度に生きてはいたが、貧しさのあまり黒パンに鹽で買った塩をつけて食べたといっちは逮捕されていた。そのために、村人の半分は赤貧にあえぎ、残りの半分は牢獄に入れられているというのがフェルネーの村の現実であった¹⁹⁾。そのために土地は肥沃ではあったが、耕作されないまま放置されていた。このヴォルテールの観察は当時の農村事情を

実に見事に表現している。というのも、当時のフランスの人口は2500万で、その内の5分の4は農民であったが、その大部分は自分の保有地を持たない貧しい小作農か折半小作農であり²⁰⁾、彼らは人頭税や20分の1税などの直接税、そして、関税、飲料消費税、塩税などの間接税、種々の賦課の他にも、領主に対しては封建的諸負担、つまり年貢、強制使用料、賦役などの、絶対主義の財政的負担を担っていたからである²¹⁾。フェルネーの貧しい農民がなぜ闇で塩を買っていたかと言えば、当時塩は当局の統制下に置かれていて高額な塩税が課されていたために、貧しい農民にはとても高額な塩を購入する余裕すらなかったからである。この塩税はあまりにも高くして農民を苦しめていたために、当時の農民一揆の大きな原因の一つともなっていた²²⁾。しかも、旧体制下では小作農は勝手に収穫物を売ることを禁じられ、土地からの収穫物の流通販売は完全に土地所有者の手に握られていたのである²³⁾。このように国家と支配階級による徹底的な農民収奪の仕組みは農村を疲弊させ、貧しい農民はよりいっそう貧しくなっていた。フランスでも日本同様に、農民は生かさず殺さずといった生殺しの無惨な状態に置かれていたのである。というのも、「農民は、貧困によって苦しめられなかったならば、働かないであろうから」²⁴⁾と一般的に考えられていたからである。ところが、実はヴォルテールも農村の悲惨な実態を知る以前にはこのような当時の支配階級の考えをそのまま疑問も抱かずに信じていた嫌いがなきにしもあらずである。というのも、1751年にベルリンで出版した『ルイ14世の世紀 *Le Siècle de Louis XIV*』では、土地所有の裕福な農民には理解を示しながらも、「日雇いの小作農が働くためには窮乏状態に追い込んで置かねばならない。これが人間の本性というものである。この大多数の人間は貧しくなければならぬが、しかし、悲惨であってはならない」と貧農に対して冷淡な考えを述べているからである²⁵⁾。

しかしながら、フェルネーの農村のすさまじい現実を見せつけられて心をつき動かされたヴォルテールは、「少しばかりの善を施すために」²⁶⁾フェルネーの領地購入を決心する。プロシア時代までは貧農に対して冷酷な考

えしか持たなかった彼だったが、屈辱的なプロシア退去からフェルネー購入までに甘受した艱難辛苦が彼に微妙な心理的变化を起こさせ、その結果、人の苦しみをより敏感に感じ取ることができるようになったのではないかと思われる。ともかく、ここに住む人間を救済し、村を繁栄に導くという彼の啓蒙哲学者としての人道主義がこの決定を促したことは確かである。そして、この領地に多額の資金を投入し、本格的な実践活動を起こすことになる。もちろんヴォルテールはこの事業を起こすための十分な資力を有していた。というのも、彼はフランス一の作家であり、啓蒙哲学者でもあったが、もう一つ忘れてならないのが、近代的な資本家・投資家としてのヴォルテールの姿である²⁷⁾。もちろん、このような莫大な資産という背景があったからこそ、彼は王侯貴族のような支配者たちに物質的に依存することもなく、相対的であるにせよ自由を確保することができたのである。こうして、フェルネーの村はヴォルテールの啓蒙哲学の実験場となったのである。これをポモーは「啓蒙の先駆的実験」²⁸⁾と呼んでいる。そして、啓蒙哲学者の慈悲によって、村の「自然は命を与えられ」²⁹⁾、農業で栄えるばかりでなく、絹織物や時計などを生産する手工業も導入されて、村民はエルドラドの国民のように富を享受することができるようになる³⁰⁾。もちろん、ヴォルテールは大資本をつぎ込んで領地の内部から改革を進めたが、それと同時に農村の貧困の最大原因でもあった租税制度の欠陥を十分に把握しながら、その免除や優遇措置を当局に訴えては、外部からの農村改革を推進しようと試みたこと³¹⁾は特筆に値する。もちろん、このような視点は、後に述べるように、重農主義者たちの改革には一切欠けていたことは確かである。

こうして、『カンディッド』の最後の手直しの時期で、出版までには数カ月という短期間の体験ではあったが、この貴重な体験はエルドラドやあるいは結論の部分の描写に活かされているように思われる。貧困にあえぐフェルネーの村の現実アンチテーゼとして啓蒙哲学者に提示され、これをもとにして、彼は農村経済、果ては国家経済における農業や農村の在り方、また望ましい農民生活の在り方についての深い考察にいたったのでは

ないかと思われる。当然のことながら、18世紀中葉のヨーロッパ諸国では重商主義が支配的な経済思想であった中で³²⁾、経済学者でもない一啓蒙哲学者が、まだ本格的に理論展開を始める以前の重農主義者たちに先んじて重農主義的視点を持って論じていることは、それが哲学コントの中ではあっても、注目に値するのではなかろうか。

それでは、いったい彼は重農主義者たちや彼らの思想をどのように評価していたのであろうか。ちょうどフェルネーの村の改造に着手しようとしていた矢先の1758年秋に出版されたばかりのミラボーの『人類の友 *L'Ami des hommes ou Traité sur la population*』と題した著書を読んだヴォルテールは「人類の友であるあのミラボー氏は、しゃべって、しゃべって、決着をつけて、裁断を下しているが、封建政府に愛着を示しているし、多くの逸脱もあって、よく間違いを犯しているが、彼が農業を愛しなさいと言うときにだけ、あの人類の友は私と関係がある」³³⁾と感想を述べて、ミラボーの言説に対して嫌悪感を隠そうとはしない。彼に対するこの嫌悪の感情はその後ずっと続き、「人類の友」をもじって「人類の害毒」³⁴⁾とまで言い切っている。それでは、重農主義者の首領としてのケネーについてはどうであろうか。彼は1760年代に重農主義者として有名になるが、それ以前には国王顧問、国王主席侍医および主席立会医師として有名であり、経済理論に関しては確かに17世紀の経済学者のボワギユベールに大きな影響を受けているようだが、それでも経済学は独学で修めたと思われる³⁵⁾。そして、国王侍医のまま、1756年には『百科全書』の「農民」や「穀粒」の項目を担当している³⁶⁾。しかしながら、宮廷での自分の立場をおもんばかってか、その著作の多くは偽名で、彼の忠実な弟子たちのミラボー、ボードー、ル・メルシエ・ドゥ・ラ・リヴィエール、デュボン・ドゥ・ヌムールらの手を借りて『農業雑誌 *Journal de l'Agriculture*』や『市民日誌 *Ephémérides du citoyen*』などで論文を発表していた³⁷⁾。そのためか、ヴォルテールは国王の愛人のポンバドゥール侯爵夫人の侍医としてのケネーについては書簡で少し話題にしているものの、経済学者としてのケネーに関する言及は彼

の書簡の中には見あたらない。従って、ヴォルテールがケネーの重農主義理論に対してどのような意見を持っていたかは手元の資料を見る限り残念ながら分からない。いずれにせよ、1760年代に入ると、単に農地の改良だけでなく、租税免除や収穫物の流通などといった面からも本格的にフェルネーの村の改造に携わっていくヴォルテールは、地方長官や徴税請負人などを経験して経済や行政の専門家であった手強い重農主義者たちを向こうに回して、彼らが主張する経済理論の弱点を巧みに突きながら批判する立場を取っていく³⁸⁾。というのも、ヴォルテールがミラボアの理論の中に「封建政府に愛着を示し」ている点をすでに鋭く嗅ぎとっているように、重農主義者たちの農業改革や税制改革の目的はすでに久しい以前から困難に陥っていたフランス王国の経済を立て直すためであり、あくまでも土地所有者の支配階級の立場からの農業改革であって、農民や農村の実状を考慮した改革ではなかったからである³⁹⁾。確かに1760年代になって重農主義が脚光を浴びる中で、彼が『農業についての書簡詩 *Epître sur l'agriculture*』（1761）を書いたからといって、ビュテルのように彼が重農主義に影響を受けたと論じる⁴⁰⁾のは早計であろう。また、ヴォルテールは後にル・メルシエに対しても激しい攻撃をしたことも記しておこう。重農主義者たちは百科全書派に対しては敵対心を示してはいたが、この二つの知識人集団は対立しながらも、思想面では少しずつ接近していった⁴¹⁾。そのために、『百科全書』の出版をめぐる次第に意見を異にしていったディドロがル・メルシエをロシア経済顧問に推奨した⁴²⁾ことを聞くに及んだヴォルテールは、嫉妬も絡んでか、書店で大評判をとったル・メルシエの『政治社会の本質的秩序 *L'Ordre essentiel des sociétés politiques*』（1767年）に対して、彼独特の皮肉を交えて痛烈な批判⁴³⁾を開始する。この著作の中でル・メルシエが論じていることは、確かにヴォルテールの考えと一致する面もあるにはあったが、彼は農民だけに重税をかける課税方法に対しては真っ向から対立し、これに答えるような形で1768年には勤勉な土地所有農民を主人公にして描いた哲学コント『40エキュの男 *L'Homme aux Quarante écus*』を

出版している。このようなヴォルテールの姿勢であったので、ル・メルシエの作品は書店で大好評だったが、それでも経済の素人が書いた『40エキュの男』は1年間で10版も重ね⁴⁴⁾、当然のことながら重農主義者の作品よりも好評を得たことはフランス経済史ではあまり知られていない。ケネーをはじめとする重農主義者たちは、マルクスが指摘したように、「封建制度の廃墟の上にブルジョワ的生産体制」⁴⁵⁾を構築しようとしたために、自分たちが属する貴族階級は従来通り課税対象からは除外し、収益は確実に取ろうと農民だけに重税を課すことを提唱したのである。このように無為をむさぼるフランスの二大土地所有者であった貴族階級や聖職者を保護する退行的経済理論が破綻をきたすのは事の必然であり、歴史がそのことを見事に証明している。もちろん、1760年代には重農主義者たちが提唱した租税制度に関してヴォルテールは反論しているが、『カンディッド』出版当時は、農業の重要性とそれによる国家経済の繁栄までは自らの経験をもとに重農主義者たちに先行して主張しているものの、税制に関しては何ら言及はしていない。しかしながら、エルドラドの国民の豊かな生活を見ると、農民が重税に苦しんでいる様子はまったく見られない。おそらくエルドラドでは、フランスとはまったく異なる税制度であったのではないかと考えられる。また、コントの結論の部分のトルコの農民やカンディッドたちの生活の描写からは、農民が自由に自分たちの収穫物の余剰分を市場で売買していることが分かる。おそらく、エルドラドの住民の豊かさも、税制面だけでなく、このような自由主義的経済活動を基本にしているのではないかと思われる。この点に関しても、ヴォルテールは重農主義者以上に近代的な経済思想の持ち主であったのではなからうか。もちろんこうした考えに対して、エルドラドではレストランやホテルでは商業の便宜をはかるために代金は政府によって支払われているということから、エルドラドでは、経済活動として商業に重点が置かれているとラコーのように考えるのは⁴⁶⁾早計であろう。

III. 労働

重農主義の次にくる特徴的な思想としては、「この国は必要のためと同時に快樂のために耕作されていました。そして、有益はどこでも快適でした」という表現からは、すでに述べたように、労働が単に必要性のためだけでなく、それ自体が快樂であり、そのような労働は社会にとっても有用であるというヴォルテール独自の労働観をあげることができよう。公私ともに貴族とは深い関係にあったヴォルテールではあるが、すでに述べたように、名前や名譽に拘泥しながら無為をむさぼる貴族階級や聖職者を鋭く批判し、ブルジョワ階級出身者にふさわしく、労働、あるいは活動というものを若い頃から重要視していた。というのも、ブルジョワ階級にとっては、「頭を使いよく働いて金持ちになることは美德」¹⁾であったからだ。このような勤労を人間活動の中心に据える思想はすでに『哲学書簡』の第25信「パスカル氏のパンセについて」の中に見ることができる。特にパスカルのジャンセニスムに発する悲惨な人間存在という考えに対して強い異論を唱えながら、「少しも行動をせず、自分を熟視していると考えの人とは、いったいどんな人であろうか。こんな人は愚かで、社会にとっては無用であるだけでなく、こんな人は存在しえないと私は言おう。……もう一度言うが、人間の本性にとってこのような空想的無気力状態にいることは不可能である。このように考えるのはばかげており、そんなことを主張するとは非常識もはなはだしい。人間が行動するために生まれてきたのは、ちょうど火が上昇し、石が落下するようなものである。無為であることと、存在しないことは、人間にとって同じことである。あらゆる違いは、仕事が穏やかなのか騒しいのか、有害なのか有益なのかという点にある」²⁾と言っている。そして、さらに続けて、「この隠された本能は社会の第一原理であると同時に、必要基盤でもあり、この本能はむしろ神の善意に由来し、そしてこれは我々の悲惨さの苦痛というよりも、むしろ我々の幸福の道具でもあるのだ。私は我々の最初の祖先たちが地上の樂園で何をしていたかは知らない

が、しかし、もし彼らの各々が自分のことだけしか考えなかったならば、人類の存続は非常に危険にさらされていたであろう。彼らが沈思黙考のためだけに、完全な感覚、つまり行動の完全な道具を持っていたと考えることはばかげたことなのではなかろうか。それに、考える頭を持った人たちが、怠惰とは偉大さの称号であり、行動とは我々の本性の墮落であると思うことができるなんておかしな話ではなかろうか⁹⁾と言っている。つまり、ヴォルテールにとっては、労働や活動こそが人間に生まれつき備わった本能であり、無為というのはこの人間の本能に反することであり、無為の人間などはありえない。そして、労働や活動をすることはその本能を満たすことであり、快樂にもつながるものである。このような労働によってこそ社会はよりいっそう発展して豊かになり、社会の構成員である個々の人間はその豊かさを享受することによって幸福になる。そして、幸福感を覚えることによってまた勤労の意欲も湧いてくるといったように、ここには一種の労働と快樂と幸福の循環論があるように思われる。このような考えを持ったヴォルテールにとって、人間の価値を決定するのはその階級や名前ではなく、その個人個人の労働や活動であり、またその労働や活動が社会にとって有益であればあるほどその価値はよりいっそう高くなるのである。このような個人としての価値は階級や家や名前によってではなく、あくまでも個人の能力や活動によって決定されるという考え方は近代の個人主義思想や人権といったようなことも予告するものであり興味深い。このような彼の能力や活動に対する基本理念は『ルイ14世の世紀』などにも多数見られる。この歴史作品の中では、この太陽王の世紀が「人間精神」の進歩によって文化・文明面でいかに発展を示したかが論証されているが、このような発展はさまざまな個人の「有益」な活動の結果であることが示されている。つまり、個人的活動が対社会との関連性の中で捉えられているのである。

『哲学書簡』の第25信「パスカル氏のパンセについて」に話を戻そう。では、いったいなぜこれほどまでにヴォルテールはパスカルの考えに反論し

ているのであろうか。その背景にはどうしてもヴォルテールが承服することができなかった偉大なパスカルを代表とするキリスト教の教えやキリスト教の労働観があったのではないと思われる。キリスト教の教えによれば、創世記第3章の原罪を犯した人間の祖先のアダムとイヴの姿は人間がいかに罪深い存在であるのか、そして「地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る」⁴⁾という神の言葉は人間の呪われた運命を示しているという。つまり、労働は原罪を犯してしまった人間を罰するために神が課されたものであり、労働は苦役でしかなく、労働は原罪に対する贖罪でもあると教会は信者に繰り返し強調していたのである⁵⁾。このようなキリスト教の労働観は、グレットウイゼンが『ブルジョワ精神の起源』で巧みに表現した「働き、成功し、成功の喜びゆえに勤労を愛する。そして金持ちになる」⁶⁾というようなブルジョワの勤労精神とはまったく相いれなかったのは当然のことである。ブルジョワでしかも反キリスト教のヴォルテールはこのようなキリスト教の決定論的人間観や労働観を真っ向から否定し、人間中心主義を前面に押し出して、労働は喜びであり、労働は社会にとっても必要不可欠であり、それは幸福へもつながるというブルジョワ的労働観を対峙させたのである。これは当時フランスの社会や経済の発展の中心的存在となってきたにもかかわらず、身分的には低く抑えられて貴族階級に従属させられ、その実力や役割も十分に認知されていなかったブルジョワを代弁したヴォルテールの貴族や聖職者に対する反発でもあった。もちろん、このような労働観を持ったヴォルテールを代表とする啓蒙思想家たちがフランス革命のきっかけになり、ついには貴族階級だけでなく教会の権威の失墜に対しても大いに貢献したのは確かである⁷⁾。

ヴォルテールは『哲学書観』で表明した労働観をずっと抱き続け、この考えをエルドラドの国民の描写に当てはめたのである。そして、結論の部分でも労働に重要性を持たせている。しかしながら、コントの登場人物たちは、シャルチエが指摘するように、『哲学書簡』ほど楽観的な人間観や勞

働観をもはや提供してはいない⁸⁾。もちろん、彼らはエルドラドの理想的な国民のように勤勉ではない。というのも、彼らは労働が本能的と言えるような率先した労働はしていないからである。彼らは、農耕はカカンボに任せて、無駄な議論をしては無為をむさぼり退屈している。この無為はおそらく主人公たちの多くが貴族階級の出身であることとも関連していると思われる。もちろん、作者の風刺は無為な貴族階級が標的になっていることは確かである。それでも、労働の重要性が最終的には彼らの活動の中心に据えられるようになる。登場人物たちが倦怠から脱出し、労働に向かうために、作者は善良なトルコの老農夫を登場させて、「仕事は我々から三つの大きな悪を遠ざけます。すなわち、倦怠、悪徳、貧困です」¹⁰⁾と労働の効用を語らせている。この倦怠、悪徳、貧困というようなむしろ悲観的な人間の側面は『哲学書簡』の労働観の中には見られない。ヴォルテールの労働観や人間観に悲観的な色合いが増幅していることが分かる。おそらくこれは、『哲学書簡』以降、特にプロシア滞在から『カンディッド』出版にいたるまでに作者がさまざまな経験をしたことや、7年戦争やリスボンの大地震のような衝撃的な出来事が彼にこのような悲観的な人間観や労働観を抱かせるようになったのではないと思われる。もちろん、ヴォルテール自身この1750年代に大きな精神的危機に瀕した¹¹⁾ことも見逃せない事実であり、このような人間観や労働観の変化の原因の一つになったと思われる。それでも、自分自身の精神的・肉体的危機や彼を取り巻く状況がいかなるものであれ、彼を危機から救済したのはやはり仕事であった。仕事が彼の存在理由でもあった。そのために、彼の人間観や労働観が多少変化したとはいえ、労働や活動は彼にとって常に重要な位置を占めていることに変わりはない。従って、老農夫が言うように、労働には倦怠、悪徳、貧困から個人を救済するという「内的効用」¹²⁾があることは、自分でも経験したことであった。それだけではない。労働にはすでに述べたように、社会を発展させ豊かにするという「外的効用」¹³⁾も彼は充分認識していた。このような労働の内的・外的効用でコントの登場人物たちは労働を通じて自己改革を

行うことができたと同時に、それぞれの活動が小さな社会にとっても有益で、豊かな社会を創出している。このように、労働というものを個人と社会との関連性において捉え、労働の組織化を提唱し、その労働の中に生産性や効率という概念を導入している¹⁴⁾ ヴォルテールはある意味で近代経済学の概念を先取りしていたと言えるのではないだろうか。コントの最後で作者はもう一度自分の労働観を再確認するかのように、創世記第2章15節を引用しながら、「人間がエデンの園に置かれたのは、働くためだったのだよ」¹⁵⁾とパングロスに言わせている。創世記の第3章は聖職者たちが強調した呪われた人間の運命であるが、この少し前の第2章では「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた」¹⁶⁾とあり、実は人間はエデンの園でも農耕していたことが記されているのである。つまり、ヴォルテールの労働観は聖書の労働観とも一致していたのである。ヴォルテールはこの労働観を自分の覚え書きの中でも「神は彼を働くために楽園に置かれたのだ。従って、人間は、鳥が飛ぶように、労働のために生まれたのだとヨブは言っている。従って、労働は懲罰ではないのだ」¹⁷⁾と繰り返し述べて、自分の労働観がいかに間違っていないかを自分が好きな聖書の人物ヨブを引用しながら確認している。作者ヴォルテールは元来楽観的な人間観や労働観を抱いていたが、彼の経験や取り巻く環境が、一時的に悲観的な考えを抱かせた。そして、この落差がエルドラドの楽観的労働観と結論の労働観に反映されているように思われる。しかしながら、フェルネーの土地の購入は新たな労働や活動への意欲につながっていった。それゆえに、カンディッドが最後に言う「我々の畑を耕さなくてはなりません」という謎めいた文言は、領主となったヴォルテールの他人の幸福を目的としたこれからの活動への決意を示しているように思われる。「我々の」という言葉は人々のために「有益」でありたいという啓蒙哲学者の願いが込められているのではないだろうか。

IV. 国家形態，政治制度

勤勉な国民が住み，経済的にも豊かな国であるエルドラドの国家形態，政治制度はどのようなものであろうか。第18章で作者は宮廷を引退した王国一の老学者を登場させて，この国の歴史を解説させている。この老学者は，南米に関する知識を得るためにヴォルテールが参考にした『インディア史』の著者で，自らもインカ族出身であったガルシラソ・ドゥ・ラ・ヴェガ¹⁾と思われるが，それと同時に歴史家ヴォルテールの分身でもあるとも言えよう。この老学者の話から，この国は現在小さな王国であるが，その昔インカ帝国の一部でもあったことが判明する。老学者によれば，この旧インカ帝国でその一部が無謀にも他国を征服しに国外に出て行ったためにかえってスペイン人から征服されてしまったが，祖国に残った者たちはそれ以降外部と接触することがなかったために，国民は純粹さと至福を保つことができたという²⁾。なぜならば，ヨーロッパ諸国は，「この地方の石や泥に対して信じられないほどの欲望を持っていて，それを得るためならば，最後の一人まで皆殺しにする」³⁾ほどにどん欲だからである。この証言からは，ヴォルテールが「人間精神の進歩」の観点からはそれなりにヨーロッパ文明の価値を認めつつも，スペインによる南米の植民地化の際に見られた残酷さやどん欲さなどのヨーロッパの否定的側面も認識していることが分かる。

では，この小さなエルドラドの王国ではどのような政治が行われているのであろうか。インカ族の一部がスペイン人から征服された後に，エルドラドに残ったインカ族の王侯たちは「より賢明」で，「国民との合意のもとで」⁴⁾王国の外には一歩たりとも出ないという命令を下している。この史実からは，王侯による政治だが，民主的に行われていたことが分かる。果たしてペルーでは実際にこのような民主的な王制が敷かれていたのだろうか。否である。というのも，ヴォルテールは『カンディッド』とほぼ同時期に著した歴史書の『習俗試論 *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations*』

(1756)では、「この国はモンテズマと同じくらいに専制的な王によって統治されている。というのも、世界中専制政治は富の産物であるからだ」⁵⁾と言っているからだ。つまり、ヴォルテールは歴史家としてペルーの政治形態を知りながらも、啓蒙哲学者としては理想的な国家を読者に提示するために、故意にエルドラドのために民主的な王制を創作したのではないだろうか。

それでは、ヴォルテールは民主的な政治形態とはどのようなものであると思っているのだろうか。『哲学書簡』の第8信の「政治体制について」では、「イギリスは国王に抵抗しながら国王の権力を抑制するのに成功し、また努力を重ねてついにあの賢明な政治体制を確立した地上で唯一の国家であるが、このような政治体制のもとでは、君主は善を行うに全能であるが、悪事を働くためにはがんにがらめであり、貴族諸侯は貴族ではあるが尊大でもなければ家臣も持たず、国民は政治に混乱もなく関与している。上院と下院は国民の裁定人であり、国王はその上に立つ裁定人である。この均衡はローマには欠けていた」⁶⁾と言って、フランスの絶対王制しか知らなかった若きヴォルテールはイギリスで初めて立憲君主制と議会制を見て驚き、この政治形態を一つの理想としたのである。ところがその反面、他の作品では、「すべての人間は自由、財産の所有、法の保護に対しては等しく同等の権利を有している」⁷⁾という人間平等の観点から、「あらゆる政治制度の中で最も許容できるのはおそらく共和国であろう。というのは、これが最も人間を本来的な平等に近づけるからである」⁸⁾と共和国に賛成の意を表明している。そして、「民主政治を私はかなり受け入れることをあなたに白状しよう」と⁹⁾ときえ言っている。しかしながら、理念としては確かに人間の本来の平等や民主的な共和国を受け入れ、他のあらゆる制度を「ふさわしからざる技巧」¹⁰⁾だとも考えながらも、実際の人間や、あるいはその人間が行う政治を鋭く観察して、彼は民主的であるはずの共和制に危惧を覚えるのである。なぜならば、人間には本来的に激しい情念や欲望が備わっているために、政治に携わる者たちでさえもそのような人間の本生か

ら免れることはできないからである。もちろん、二大政党による議会制度によって、政治に対する情熱もそれぞれの政党が相互に監視し合い、しかも裁定人がいて、二つの勢力による異なる法の解釈に対して正しい判断を下したり、必要とあらば法を改正することによってよりよい結果を生み出すこともあるだろう。ところが、このような共和制であっても、必ずしも理想通りに行かずに、政治家たちは党利党略のために自分たちの主張だけに固執したり、あるいはまた私利私欲のために政治権力を欲望することになってしまう危険性も大いにありうる。そのために、多数の政治家による政治を前提とする共和制の政治の舞台は、権謀術数を弄する政治家たちの権力争いの場と化してしまうのではないかと彼は懸念するのである。そうすると、政治権力は多数よりもたった一人の人間によって掌握された方がより民主的な政治が行われるのではないかという結論に達するのである¹¹⁾。こうして、結局彼が考えついた妥協の産物というのが、当時フランスよりもうまく機能していたイギリスの政治制度を参考にした啓蒙君主による民主政治であった。もちろん、この場合、王は確かに一人で政治権力を握っているようには見えても、王の周囲に配置された優秀な頭脳集団が王に進言する機能を果たさなければならぬのである。それが啓蒙哲学者の役割であるとヴォルテールは考えていたのである。

それでは、エルドラドの王制はどのように機能しているのだろうか。二人のヨーロッパ人旅行者は首都の一隅に位置する巨大な宮殿に到着する。この宮殿の大きさや豪華さはともかくとして、この宮殿の配置は政治権力の在り方を示唆しているように思われる。というのも、中央の配置は権力の誇示、あるいは臣民に対する威嚇であるのに対して、このような末端の配置は権力を誇示する必要がないことを示しているのではないだろうか。そのことがほとんどブルジョワ的とも言える王への表敬方法の単純さや、それに対する王の「想像できる限りの優雅さ」¹²⁾や礼儀正しさに現れている。そして、この王が啓蒙君主であるという証拠に、彼がエルドラドを去る覚悟をしたカンディッドたちに対して、「私は自分の国がたいした国では

ないことは十分に承知している。もちろん私には外国人を引き留める権利はない。そんなことをするなんていうのは横暴であり、我々の風習にも法律にもない。人間は皆自由なのだから」¹³⁾という発言からも十分に理解できる。もちろん、この王の発言は、横暴であったプロシア王に対する痛烈な風刺でもある。こうした王の発言からは、この国では法の整備が行き届いていることも想定される。そして、このような啓蒙君主を頂点に戴き、法も整っている王国では、当然のことながら国民の民度も高く、驚くべきことには裁判所も高等裁判所も刑務所も存在しないのである¹⁴⁾。民度の高さは、例えば、御者の態度にも現れている。フランスでは「御者のように口汚くののしる」¹⁵⁾というような表現があるように、御者は野蛮であると一般的に思われている。ところが、そんな御者でさえもエルドラドでは非常に礼儀正しい¹⁶⁾。もちろん、この礼儀正しさというのは、ヴォルテールが歴史書『ルイ14世の世紀』や『ルイ15世の世紀の概要 *Précis du Siècle de Louis XV*』¹⁷⁾(1768)の中で、人間精神の進歩の一つの指標として位置づけているものである。では、このような啓蒙君主のもとで誰が実務を行っているかと言えば、「宮廷大官」¹⁸⁾の表現しか見あたらない。そのために、彼らが貴族なのかあるいは一般市民なのかどうかということは一切明示されていない。ただ、この章では「召使い」¹⁹⁾という言葉が使われていることから判断すれば、この王国には階級制度が存在することが分かる。ただ、この階級制度は旧体制下では至極当たり前のことであり、ヴォルテールをあまり批判することはできないだろう。

この啓蒙君主は文化的でもあるようで、数千人の音楽家たちが宮廷で音楽を奏でている²⁰⁾。文化という点では、この国には科学博物館があり、数学や物理の実験器具が多く陳列されている²¹⁾ことをつけ加えておこう。これは、ヴォルテール自身がニュートン物理学をフランスに紹介した人物であり、自らも多くの物理の実験道具をシレー城に備えては、物理学者でもあったデュ・シャトレ侯爵夫人と物理実験に勤しんだ経験を踏まえてこのような記述になったのではないかと思われる。もちろん、彼は文明の発展には物

理や工学などの科学の発展が欠かせないことを十分認識していたからでもある。この国が文化面だけでなく技術面でも優れていることを証明するかのように、この宮殿には数千人の物理学者や技官が働いている²²⁾。

この民主的な王制のもとでは、社会インフラの整備も行われている。まず、国の文化や文明の発達に大きく関わっている学校教育があげられる。この国に主人公たちが到着して最初に見かけるのは、村はずれにある小学校で遊ぶ子供たちの姿である。宝石でできた石けりの石から想像して、カンディッドたちは王の子供たちが教育を受けていると勘違いをする²³⁾、これは単なる貧しい村の子供たちであることが後で判明する。フランスでは「ヴォルテールのブルジョワジー」²⁴⁾と呼ばれる階級が支配した²⁵⁾19世紀になってやっと男子に限って公教育が実施されるようになるが、18世紀半ばにはまだ公教育という概念自体がなく²⁶⁾、ヴォルテールは時代を先取りして公教育を考えていたと言えるのではなかろうか。また、この国では、馬車の保有台数も多く、これらの馬車が高速で走ることができることから、道路の整備も十分に行われていると想定される。また、すでに述べたように、商業の振興をはかるために、ホテルやレストランの宿泊・飲食料は政府によって支払われている²⁷⁾。ただ、これに関しては作家の想像物ではなくガルシラソ・ドゥ・ラ・ヴェガの『インディア史』を参考に書いたものである。それによると、インカでは旅行者の便宜を考えて、すべての大道に施療院を建設し、旅行者の必需品を備えると同時に、食事も供していたという²⁸⁾。また、コントのエルドラドでも、公共の福祉のための建築物も多く、天にまで届くほどの高層建築物があるかと思えば、大きな市場、さまざまな泉を配した大きな広場なども建てられている²⁹⁾。この泉に関しては、ポモーによれば、当時パリでは増加する人口に見合うような給水所としての泉が少なく³⁰⁾、ヴォルテールはこのようなパリの現状をふまえて書いたものと思われる。いずれにしろ、公共事業や都市計画についても関心が深かったヴォルテールは、『パリの美化 *Des embellissements de Paris*』という作品も著述していて、これらのエルドラドの建造物も「有益」、「高尚」

「快適」という観点から³¹⁾考え出されたのではないかと思われる。

このように、エルドラドの国家は王制であるにもかかわらず、民主的な政治が行われ、しかも、社会インフラの整備も十分に施されている。もちろん、このようなインフラの整備のためには国家財政が十分に潤っていることが前提となるが、おそらくそこには国民の勤勉な労働による税収入が大きく寄与しているものと想定される。もちろん、税収入といっても豊かな国民生活から類推すれば、税負担もあまり大きなものであるとは思われない。また、民主的な運営が行われていると想像される税の支出は、最終的には国民に厚生福利やインフラの整備という形で還元されているのである。このような国家をヴォルテールは理想国家と考えていたのではないだろうか。

V. 国民生活

すでに述べたように、エルドラドは繁栄し、国の道路もきらびやかな馬車で覆われるほど、国民はその豊かさを享受している。この豊かさは、例えば、カンディッドが生まれ育ったトゥンダー・テン・トロク男爵の城館に比べれるとその差は歴然としている。というのも、男爵はウェストファリアで最も有力な男爵の一人であるにもかかわらず、入り口が一つと窓がほんの少ししかない城館に住んでいるが¹⁾、このような城を持っていること自体が有力者の証拠であったからだ。もちろん、このような粗末な男爵の城の描写はプロシアに対する作家の悪感情が投影されていて、多少誇張された面もあるが、しかしながら、そこにはしかるべき背景があった。というのも、すでに述べたように、彼は1750年にフリードリッヒ2世の要請を受けてポツダムに向かうが、その途中で家畜と見まがうプロシアの農民の実態を見て驚き、「家と称する大きな掘っ立て小屋の中には、世界で最も好意的に他の動物とごちゃまぜになって住む人間と称する動物が住んでいる」²⁾と姪に書き送っているからである。おそらくこの貧しさはフェルネー

の村民以上だったのではないかと想像される。このようなプロシアでは、エルドラドのようなきらびやかな馬車に乗ることができたのは、ほんに一部の王侯貴族に限られていたと思われる。

さて、エルドラドのきらびやかな馬車の速度は、それを牽引する「赤い羊」の速度にもよるが、すでに述べたように、この国では道路も整備されていたと想定できることから、このような高速運転ができたと思われる。それにまた、この国は非常に多くの優秀な物理学者や技官を雇用していることから、馬車を建築する技術水準も高いことが関係しているように思われる。ただ、ここで注意しなければならないのは、赤い羊に牽かれた馬車が実在していたということに関しては大いに疑問がある。というのも、実際のエルドラドでは、ミロの研究によれば³⁾、「赤い羊」のもとなつたラマは馬車を牽引する動物ではなかつた上に、インカ族は車輪そのものの存在を知らなかつたからである。つまり、ヴォルテールが豊かさの一例としてあげたきらびやかな高速馬車は、ヨーロッパの基準に従って作者が想像して作りあげた代物であることが分かるのである。ただ、馬車それ自体はヴォルテールにとっては豊かさを表す一つの指標であつたと思われる。

エルドラドの豊かさはこれ以外の場面でも証明される。例えば、カンディッドとカカンボは村のはずれの家に近づくが、その家はヨーロッパの宮殿のように建てられている。ところが、ここはレストランを備えた単なるホテルに過ぎないのだ。しかしながら、給仕の男女の服装は金の布でできていて、出される食事もこの国の豊かさを反映するように、「2羽のオウム添えポタージュ、重さ100キロの茹でコンドル、皿に盛ったハチドリ300羽、また別の皿に盛ったハチドリ600羽。美味なシチュー、おいしいケーキ類」⁴⁾ というように豪華な料理が次から次へとクリスタルの器に盛られて供されるのである。もちろん、これらの料理はポタージュやデザートといったように、フランス料理が基本になっていて、素材は別として、あまりエルドラド風の料理とは思われない。それでも、うまい料理を愛したヴォルテール⁵⁾は南米の風物を参考に彼なりに想像を働かせてエルドラド料理を

創作したのではないかと思われる。ところが、このホテルの主人はこの村は貧しいためおいしい食事を供することができないが、他の村ではもっと客にふさわしい食事を出すことができると弁解する⁶⁾。もちろん、読者はこのホテルの主人の言葉と上記の食事内容とを比較しながら、他の村のホテルの食事の豪華さに思いを馳せることができるのである。料理がフランス風エルドラド料理だとしても、食事の贅沢さから、この国の豊かさをうかがい知ることができるのである。また、このような豊かな生活が背景になっているためか、この国の国民は長生きのようである。例えば、先に紹介した、宮廷を引退した老学者は172才である⁷⁾。もちろん、このような豊富な食料や長寿は、ヨーロッパに古くからある桃源郷伝説⁸⁾を作者が意図的に再現したものと思われるが、ここには作者の戯れが感じられる。

では、豊かな生活を営むエルドラドの国民の精神生活はどんなものであろうか。カンディッドはこの国について、老学者に政治形態、習俗、女性、演劇、芸術などについて尋ねるが、その中でも一番彼を驚かせるのが宗教である⁹⁾。この国では、神という概念自体はあるものの、それはキリスト教的な神概念ではない。というのも、神の恩寵によりすべてが与えられているこの国では、神に祈りを捧げて何かを願望する必要はもうないからだ。しかしながら、すべての人に豊かな実りをもたらしてくれる神の恩寵には感謝を示す必要がある。すべての人に等しく恩寵を与える神はすべての人に関係する「全員の宗教」¹⁰⁾でもあるために、特定の人が聖職者になることはない。「全員が司祭」¹¹⁾となって、王も一家の主人も皆神の恩寵行為の賛歌を毎朝5～6000人の音楽家たちとともに高らかに唱っている¹²⁾。もちろん、ここで作者が意図したことは、大きな権力機構と化したキリスト教会を批判しながら、自らが信じる「すべての人のための宗教」である自然宗教、つまり理神論的神概念を提示することではなかったかと思われる。

このように、エルドラドの国民は物質的にも、精神的にも豊かな生活を営んで、長生きをしていることが分かる。このような生活と人生をヴォルテールは理想としたのではないだろうか。

VI. 結 論

以上述べたように、人跡未踏のエルドラドはヨーロッパ文明からも毒されることなく純粹さを保つ幸福な国であった。しかも、勤勉で穏やかな国民を有するエルドラドは豊かな経済国家でもあり、ヨーロッパと接触することがなかったにもかかわらず、ヨーロッパ以上に高度な文明を築いた文化国家でもあった。この国では「寛容と個人的自由」¹⁾が保証されている²⁾。ヴォルテールは当時流行していたユートピア思想²⁾を受けて、自らも自分の啓蒙思想や史実などを基本に、現実のプロシアやフランスを批判するために、このような理想国家を想定してみたのではないだろうか。もちろん、すでに述べたように、エルドラドの描写は多くの矛盾も含み、「すべてが善の国」というのは、パングロスが唱えるライブニッツの最善主義を風刺するものであり、ヴォルテールは理想的国家などというものを考察しようなどとは思わなかったのではないかというサレイユのような考えもある³⁾。しかしながら、これまでに見てきたように、エルドラドの描写は、幻想、理想、現実、矛盾を含みながらも、ある種の理想的国家を示しているように思われる。しかしながら、洞察力に非常に優れた「現実主義者」であったヴォルテールは、このような理想論がすぐに現実化するとは決して思っていなかった。もちろん、このような背景には、理想化したフリードリッヒやプロシア、あるいはフランスに対する失望や幻滅も作用している。そのために、主人公のカンディッドはこのような理想的な国にとどまらずに、ヨーロッパに戻ることを決意するのである。つまり、カンディッド＝ヴォルテールは、理想論のままにとどまることなく、現実を見つめ、理念の実現化に向けて少しずつ行動を起こすことによって、有益な社会参加をすることの重要性を認識したのではなかろうか。コントの結論がこのことを示している。もちろん、この結論は、ボモーがいみじくも指摘したように、啓蒙哲学者ヴォルテールの残り20年の人生の指針ともなっている⁵⁾。

註

I. 序

- 1) Jean-Michel Racault, “L’Utopie narrative en France et en Angleterre 1675-1761”, in *Studies on Voltaire and the eighteenth century* (以下 SV と略す), vol 280, Oxford, Voltaire Foundation, 1991, p. 663.
- 2) *Ibid.*, p. 666
- 3) Voltaire, *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, *Romans et Contes*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1979, p.186.

II. 国家経済

- 1) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, *op. cit.*, p. 184.
- 2) Voltaire, *Lettres Philosophiques*, éd. Gustave Lanson, t. I, Neuvième Lettre, Sur le Gouvernement, Paris, Marcel Didier, 1964, p. 107.
- 3) *Ibid.*, Dixième Lettre, Sur le commerce, pp. 121-122.
- 4) この点に関しては次の作品を参照のこと。Robert Galliani, “Voltaire cité par les brochures de 1789”, SV. 132, 1975, PP. 17-54; “La Présence de Voltaire dans les brochures de 1790”, SV. 169, 1977, PP. 69-114; “Voltaire et les autres philosophes dans la Révolution: brochures de 1791, 1792, 1793”, SV. 174, 1978, PP. 69-112.
- 5) Jacques van den Heuvel, *Voltaire dans ses contes*, Paris, Armand Colin, 1970, p. 236.
- 6) Voltaire, *Correspondance IV*, éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1978, p. 349, Lettre à Jean-Robert Tronchin, 23 janvier 1755.
- 7) Voltaire, *Œuvres Complètes*, éd. Moland, t. X, pp. 362-363, cité par Jacques van den Heuvel, *Voltaire dans ses contes*, *op. cit.*, pp. 236-237.
- 8) Jacques van den Heuvel, *Voltaire dans ses contes*, *op. cit.*, p. 238.
- 9) *Ibid.*, p. 237.
- 10) *Ibid.*
- 11) René Pomeau et Christiane Mervaud, *De la Cour au jardin*, Voltaire en son temps 3, Oxford, Voltaire Foundation, 1991, pp. 336-341.
- 12) *Ibid.*, p. 346.
- 13) *Ibid.*
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*
- 16) *Ibid.*, p. 350.

- 17) Ibid., pp. 351-352. トゥルネーの購入は比較的簡単に進んだが、フェルネー購入の契約書の署名にこぎつけるためには予想以上に時間がかかり、実際には翌年1759年2月9日にまで持ち越された。しかしながら、ヴォルテールはフェルネーの村で前年の秋からすでに領主として振る舞っている。もちろん、これは村民の貧しさにいたたまれなくなって、契約終結を前に行動を起こしたことによるものである。
- 18) Voltaire, *Correspondance V*, éd Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1980, p. 265, Lettre à Antoine-Jean-Gabriel Le Bault, 18 novembre 1758.
- 19) Ibid.
- 20) 前川貞次郎, 『絶対主義の時代』, 新修京大西洋史Ⅴ, 創元社, 1976, p. 51. 前川氏によれば, 革命当時の統計では, 人口約2500万の中で, 貴族・僧侶が約50万, 第三身分のものが2450万で, その中で農民が約2000万, 市民は450万いたと推定される。しかしながら, フランスの経済学者のビュテルは全人口に占める農業人口の割合を約85%としている (Paul Butel, *L'Economie française au XVIII^e siècle*, Paris, SEDES, 1993, p. 165)。いずれにしろ, 旧体制下のフランスでは農民が人口の大部分を占めていたのである。しかしながら, 人口の85%を占めていた農民ではあるが, 農業生産が全生産に占める割合は85%以下であった。
- 21) Ibid., pp. 51-52.
- 22) Voltaire, *L'Homme aux Quarante écus*, éd Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, *Romans et Contes*, op. cit., p. 1059, Notice par Frédéric Deloffre.
- 23) ジャン・モリエ, 『フランス経済理論の発展』, 未来社, 1962, p. 48.
- 24) Ibid., p. 76.
- 25) Voltaire, *Le Siècle de Louis XIV*, éd. René Pomeau, *Œuvres historiques*, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1978, p. 996.
- 26) Voltaire, *Correspondance V*, op. cit., p. 265, Lettre à Antoine-Jean-Gabriel Le Bault, 18 novembre 1758.
- 27) ヴォルテールの財産や財政状況については, Louis Nicolardot, *Ménage et Finances de Voltaire*, Paris, E. Dentu, 1854 という非常に詳細な研究があるが, この研究からすでに150年以上も経っている上に, ヴァイヨが指摘するように (René Vaillot, *Avec Mme Du Châtelet*, Voltaire en son temps 2, Oxford, Voltaire Foundation, 1988, p. 396), その後に発見された資料もあって, 額についてはニコラドの数字を鵜呑みにすることはできない。しかしながら, どの資料についても一致するのは, ヴォルテールが裕福なブルジョワの息子で, 父や兄との仲が悪く, 親兄弟からの遺産もそれほど多くはなかったが, ブルジョワの息子であるためか, 利殖や蓄財にかけてはその才を発揮したことである。例えば, 多くの人が破産に追い込まれたローのシステムによっては大金を稼いだのを始め

として、南米貿易や戦時の物資補給などにも多額の投資をし、その配当や利子収入によって王侯貴族に勝るとも劣らない裕福な生活を送っていた。ヴァイヨの研究によれば、1749年の時点でヴォルテールの年間収入は76038リーヴル(旧体制下の通貨単位で現在ではフラン)であった。フェルネーの土地購入に対してヴォルテールが支払った額は13000リーヴルだったが (*De la Cour au jardin*, p. 352), これは年間収入のおよそ2年分に相当する。しかしながら、これは彼の莫大な財産の一部に過ぎなかった。もちろん、この前にもデリス購入にそれ相当の額を支払っている。また、彼は自分の財産の一部分をフランス内外の王侯貴族に貸しては、年利10%以上の高い利息を受け取っていた。例えば、ドイツのフリードリッヒの親族に貸した額は150000リーヴルであったと言われるが、年間15750リーヴルの利子を定期的に受け取るという具合である (Daniel Muller, *Les rentes viagères de Voltaire*, Paris, Honoré Champion, 1920, p.12)。しかし、この貸し付けは全体の貸付額のほんの一部に過ぎなかった。18世紀初頭のフランスの国家の財政収入の規模が2億リーヴル (中村英雄, 『ジョン・ローの周辺』, 千倉書房, 1996, p. 144)であったことを考えれば、彼が保有していた資産の額がいかに大きかったかが理解できよう。また、ある試算によれば、ヴォルテールの資産総額は現在の額にして、数十億円から数百億円とも言われるほど莫大なものであった。

- 28) *De la Cour au jardin*, op. cit., p. 355.
- 29) Voltaire, *Œuvres Complètes*, éd. Moland, op. cit., t. X, p. 443, cité par René Pomeau, *De la Cour au jardin*, op. cit., p. 355.
- 30) ヴォルテールのフェルネーの村での領主としての活動の詳細については、*De la Cour au jardin*, op. cit., pp. 347-375, および René Pomeau, “*Ecraser l’Infâme*”, Voltaire en son temps 4, Oxford, Voltaire Foundation, 1994, pp. 18-53を参照のこと。
- 31) “*Ecraser l’Infâme*”, op. cit., pp. 23-25.
- 32) Voltaire, *L’Homme aux Quarante écus*, op. cit., p. 1058, Notice par Frédéric Deloffre.
- 33) *Correspondance V*, op. cit., p. 265, Lettre à Antoine-Jean-Gabriel Le Bault, 18 novembre 1758.
- 34) *L’Homme aux Quarante écus*, op. cit., p. 1059.
- 35) ジャン・モリニエ, 『フランス経済理論の発展』, p. 83.
- 36) *L’Homme aux Quarante écus*, op. cit., p. 1059, Notice.
- 37) ジャン・モリニエ, 『フランス経済理論の発展』, p. 83.
- 38) *L’Homme aux Quarante écus*, op. cit., p. 1059, Notice.
- 39) ジャン・モリニエ, 『フランス経済理論の発展』, pp. 85-88.
- 40) *L’Economie française au XVIII^e siècle*, op. cit., p. 168.
- 41) *Mémoires secrets*, t. III, Londres, 1780, pp. 271-272, cité par Frédéric Deloffre,

- L'Homme aux Quarante écus*, op. cit., p. 1058, Notice.
- 42) *L'Homme aux Quarante écus*, op. cit., pp. 1059-1060, Notice.
- 43) Voir, Voltaire, *Correspondance IX*, éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1985, p. 63, Lettre au Prince Dmitri Mikhailovitch Golitsin, 14 août 1767; p. 136, Lettre à Etienne-Noël Damilaville, 16 octobre 1767; p. 152, Lettre à Etienne-Noël Damilaville, 2 novembre 1767; p. 153, Lettre à François-Thomas Moreau, Seigneur de La Rochette, 3 novembre 1767; p. 226, Lettre à Daniel-Marc-Antoine Chardon, 25 décembre 1767; p. 273, Lettre à François-Thomas Moreau, Seigneur de La Rochette, 18 janvier 1768; p. 293, Lettre à Daniel-Marc-Antoine Chardon, 3 février 1768.
- 44) *L'Homme aux Quarante écus*, op. cit., p. 1065, Notice.
- 45) K. Marx, *Histoire des doctrines économiques*, éd. Coste, t. I, p. 56, 引用ジャン・モリニエ, 『フランス経済理論の発展』, p. 87
- 46) "L' Utopie narrative en France et en Angleterre 1675- 1761", op. cit., p. 674.

III. 労働

- 1) ベルンハルト・グレットウイゼン, 野沢協訳, 『ブルジョワ精神の起源』, 法政大学出版局, ウニベルシタス叢書, 1979, p. 250.
- 2) *Lettres philosophiques*, éd. Gustave Lanson, t. II, Vingt-cinquième Lettre, Sur les Pensées de M. Pascal, Paris, Marcel Didier, 1964, pp. 205-206.
- 3) Ibid., p. 206.
- 4) 『旧約聖書』, 創世記第4章17節, 日本聖書教会, 1970, p. 4.
- 5) 『ブルジョワ精神の起源』, op. cit., p. 252.
- 6) Ibid., p. 253. グレットウイゼンは『ブルジョワ精神の起源』の第2部「ブルジョワジーと教会の社会観」の第3章3節の「勤労」の項目でブルジョワジーの労働観を述べているが, このブルジョワジーの労働観とヴォルテールの労働観の間には共通点が多い。
- 7) Ibid., p. 263.
- 8) Pierre Chartier, *Candide de Voltaire*, Foliothèque, Paris, Gallimard, 1994, p. 153.
- 9) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 233.
- 10) Ibid., p. 232.
- 11) *Voltaire dans ses contes*, op. cit., pp. 240-266. ウーヴェルによると, ヴォルテールは1755年から1757年にかけて, そして1758年に精神的危機に陥っている。これ以外にも, ヴォルテールは人生において何度も精神的危機, つまり一種の鬱状態を経験している (Robert Favre, *La Mort au Siècle des lumières*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 1978, p. 392.)。彼の鬱の気質については, プレアンと

ロッシュの次の著書の「ヒポコンドリー」の項を参照のこと (Jacques Bréhant et Daniel Roche, *L'Envers du roi Voltaire*, Paris, A.-G. Nizet, 1989, pp. 123-138)。

- 12) *Candide de Voltaire*, op. cit., p. 153
- 13) Ibid.
- 14) Ibid.
- 15) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 233.
- 16) 『旧約聖書』, 創世記第2章17節, op. cit., p. 2. 日本の聖書では「これを耕し, これを守らされた」と「耕す」ことが結果のように訳されているが, フランスの聖書では「これを耕すためとこれを守るために」というように目的として訳されている (*La Bible*, Genèse 2, 17, Paris, Seuil, 1973, p. 39)。このフランスの原文は当然のことながら後のヴォルテールの聖書の引用と一致する。
- 17) Théodore Besterman, *Voltaire's Notebooks*, t. II, p. 311, cité par Frédéric Deloffre, *Candide*, op. cit., p. 889.

IV. 国家形態, 政治制度

- 1) *Candide*, éd. René Pomeau, *The Complete Works of Voltaire* 48, Oxford, Voltaire Foundation, 1980, p. 184. ポモーによると, ヴォルテールはエルドラドに関する知識の大半をガルシラソ・ドゥ・ラ・ヴェガの『インディア史』と, 『西インド諸島におけるフランソワ・コレアルの旅行記』から得ているという。
- 2) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 187.
- 3) Ibid., pp. 187-188.
- 4) Ibid., p. 187.
- 5) Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations*, t. II, éd. René Pomeau, Paris, Editions Garnier Frères, 1963, p. 354.
- 6) *Lettres philosophiques*, t. I, op. cit., p. 88.
- 7) *Essai sur les mœurs*, in André Versaille, *Dictionnaire de la pensée de Voltaire par lui-même*, Paris, Editions Complexe, 1994, p. 381.
- 8) Voltaire, *Idées républicaines d'un membre d'un corps*, 1762, in *Dictionnaire de la pensée de Voltaire par lui-même*, op. cit., p. 1018.
- 9) Voltaire, *L'A, B, C*, in *Dictionnaire de la pensée de Voltaire par lui-même*, op. cit., p. 1018.
- 10) Ibid., p. 1019.
- 11) Ibid., p. 1018.
- 12) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 189.
- 13) Ibid., p. 190.
- 14) Ibid., p. 189.

- 15) Voltaire, *Candide*, éd. André Magnan, Paris, Bordas, 1984, p. 106.
- 16) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 186.
- 17) Voltaire, *Précis du Siècle de Louis XV*, éd. René Pomeau, *Œuvres Historiques*, op. cit.
- 18) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 189.
- 19) Ibid., p. 189.
- 20) Ibid., p. 189.
- 21) Ibid., p. 190.
- 22) Ibid., pp. 190-191.
- 23) Ibid., p. 185.
- 24) Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, Paris, Armand Colin, 1968, p. 8.
- 25) Françoise Lelièvre, Claude Lelièvre, *Histoire de la scolarisation des filles*, Paris, Nathan, 1991, p. 49. 1833年にギゾー法により、各市町村に公立小学校の開設が課せられたが、実施は1850年のファルー法まで待たなければならなかった。
- 26) Martine Sonnet, "Une fille à éduquer", in Georges Duby, Michelle Perrot, *Histoire des femmes 3, XVI^e-XVIII^e siècles*, Paris, Plon, 1991, pp. 117-119. ソネによれば、1762年のルソーの『エミール』の発禁処分と、同年のイエズス会のフランス追放によるコレージュ網壊滅の二つの事件によって、1760年以降教育の問題が盛んになったという。革命議会で公教育制度の設立が論議されたものの、実施にはいたらなかった。
- 27) Ibid., p. 186.
- 28) *Candide*, éd. René Pomeau, op. cit., p. 184.
- 29) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 189.
- 30) *Candide*, éd. René Pomeau, op. cit., p. 190.
- 31) Voltaire, *Des embellissements de Paris*, 1749, in *Dictionnaire de la pensée de Voltaire par lui-même*, op. cit., p. 1240.

V. 国民生活

- 1) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 145.
- 2) Voltaire, *Correspondance III*, éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1975, p. 204, Lettre à Marie-Louise Denis, 24 juillet 1750.
- 3) César Mirò, *Alzire et Candide ou l'image du Pérou chez Voltaire*, Paris, 1967, cité par René Pomeau, *Candide*, op. cit., p. 183.
- 4) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., pp. 185-186.
- 5) ヴォルテールと料理については、次に著書が参考になる：Christiane Mervaud,

Voltaire à table, Plaisir du corps, plaisir de l'esprit, Paris, Editions Desjonquères, 1998.

- 6) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p. 186.
- 7) *Ibid.*, p. 187.
- 8) “L’Utopie narrative en France et en Angleterre 1675- 1761”, op. cit., pp. 668-669.
- 9) *Candide*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, op. cit., p.188.
- 10) *Ibid.*
- 11) *Ibid.*
- 12) *Ibid.*

VI. 結論

- 1) Raymond Trousson, *Voyages aux pays de nulle part*, Bruxelles, Editions de l’Université de Bruxelles, 1979, p. 127.
- 2) *Ibid.*
- 3) Jean Sareil, *Essai sur Candide*, Genève, Droz, 1967, pp. 56-57.
- 4) Jean Goulemot, André Magnan, Didier Masson (dir.), *Inventaire Voltaire*, Paris, Gallimard, 1995, p. 380.
- 5) *De la cour au jardin*, op. cit., p. 351.

参考文献

- VOLTAIRE, *Candide*, éd. André Magnan, Paris, Bordas, 1984.
- VOLTAIRE, *Candide*, éd. René Pomeau, The Complete Works of Voltaire 48, Oxford, Voltaire Foundation, 1980.
- VOLTAIRE, *Correspondance III*, éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1975.
- VOLTAIRE, *Correspondance IV*, éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1978.
- VOLTAIRE, *Correspondance V*, éd. Theodore Besterman, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1980.
- VOLTAIRE, *Essai sur les mœurs et l’esprit des nations I et II*, Paris, Editions Garnier Frères, 1963.
- VOLTAIRE, *Lettres Philosophiques I et II*, éd. Gustave Lanson, Paris, Marcel Didier, 1964.
- VOLTAIRE, *Micromégas, Zadig, Candide*, éd. René Pomeau, Paris, GF-Flammarion, 1994.
- VOLTAIRE, *Œuvres Historiques*, éd. René Pomeau, Bibliothèque de la Pléiade,

- Paris, Gallimard, 1978.
- VOLTAIRE, *Romans et contes*, éd. Frédéric Deloffre et Jacques van den Heuvel, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1979.
 - VOLTAIRE, *Romans et contes*, éd. René Pomeau, Paris, GF-Flammarion, 1992.
 - VOLTAIRE, *Dictionnaire de la pensées de Voltaire par lui-même*, éd. André Versaille, Paris, Editions Complexe, 1994.
 - Bible*, éd. Emile Osty, Paris, Seuil, 1973.
 - BREHANT, Jacques, ROCHE, Daniel, *L'Envers du roi Voltaire*, Paris, A.-G. Nizet, 1989.
 - BUTEL, Paul, *L'Economie française au XVIII^e siècle*, Paris, SEDES, 1993.
 - CHARTIER, Pierre, *Candide de Voltaire*, Foliothèque, Paris, Gallimard, 1994.
 - FAVRE, Robert, *La Mort au Siècle des lumières*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 1978.
 - GALLIANI, Robert, “Voltaire cite par les brochures de 1789, in *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, vol. 132, Oxford, Voltaire Foundation, 1975.
 - GALLIANI, Robert, “La Présence de Voltaire dans les brochures de 1790”, in *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, vol. 169, Oxford, Voltaire Foundation, 1977.
 - GALLIANI, Robert, “Voltaire et les autres philosophes dans la Révolution: les brochures de 1791, 1792, 1793”, in *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, vol. 174, Oxford, Voltaire Foundation, 1978.
 - GOLDZINK, Jean, *Candide*, Paris, Magnard, 1989.
 - GOLDZINK, Jean, *Voltaire*, Paris, Hachette, 1994.
 - GOULEMOT, Jean, MAGNAN, André, MASSEAU, Didier (dir.), *Inventaire Voltaire*, Paris, Gallimard, 1995.
 - HEUVEL, Jacques van den, *Voltaire dans ses contes*, Paris, Armand Colin, 1970.
 - MAGNAN, André, *Voltaire, Candide ou l'Optimisme*, Paris, Presses Universitaires de France, 1987.
 - MERVAUD, Christiane, *Voltaire en toutes lettres*, Paris, Bordas, 1991.
 - MERVAUD, Christiane, *Voltaire à table, Plaisir du corps, plaisir de l'esprit*, Paris, Editions Desjonquères, 1998.
 - MULLER, Daniel, *Les rentes viagères de Voltaire*, Paris, Honoré Champion, 1920.
 - NICOLARDOT, Louis, *Ménage et Finances de Voltaire*, Paris, E. Dentu, 1854.
 - POMEAU, René, *D'Arouet à Voltaire*, Voltaire en son temps 1, Oxford, Voltaire Foundation, 1985.
 - POMEAU, René, MERVAUD, Christiane, *De la Cour au jardin*, Voltaire en son

- temps 3, Oxford, Voltaire Foundation, 1991.
- POMEAU, René, “*Ecraser l’Infâme*”, Voltaire en son temps 4, Oxford, Voltaire Foundation, 1994.
 - PROST, Antoine, *Histoire de l’enseignement en France 1800-1967*, Paris, Armand Colin, 1968.
 - RACAULT, Jean-Michel, “L’Utopie narrative en France et en Angleterre 1675-1761”, in *Studies on Voltaire and the eighteenth century*, vol. 280, Oxford, Voltaire Foundation, pp. 660-691.
 - SAREIL, Jean, *Essai sur Candide*, Genève Droz, 1967.
 - SONNET, Martine, “Une fille à éduquer”, in Georges Duhy et Michelle Perrot, *Histoire des femmes. 3, XVI^e—XVIII^e siècles*, Paris, Plon, 1991.
 - TROUSSON, Raymond, *Voyages aux pays de nulle part*, Bruxelles, Editions de l’Universite de Bruxelles, 1979.
 - VAILLOT, René, *Avec Mme Du Châtelet*, Voltaire en son temps 2, Oxford, Voltaire Foundation, 1988.
 - 『旧約聖書』, 日本聖書教会, 1970.
 - ベルンハルト・グレットウイゼン, 野沢協訳, 『ブルジョワ精神の起源』, 法政大学出版局, ウニベルシタス叢書, 1979.
 - 前川貞次郎, 『絶対主義の時代』, 新修京大西洋史 V, 創元社, 1976.
 - ジャン・モリエエ, 『フランス経済理論の発展』, 未来社, 1962.
 - 中村英雄, 『ジョン・ローの周辺』, 千倉書房, 1996.